

中級日本語学習者の語用論的能力 -ヘッジを伴う間接発話行為の理解能力の考察-

堀田智子(東北大学大学院国際文化研究科)

1

本発表の構成

1. 研究の背景
2. 先行研究
3. 研究目的
4. 研究方法
5. 結果と考察
6. おわりに

2

1. 研究の背景 – 語用論的能力 –

➤ 円滑なコミュニケーション↑

★語用論的能力の向上

- コミュニケーション能力の構成要素の一つ

(Bachman & Palmer 1996)

- 社会文化的規範についての知識や理解、そしてそうしたものを応用し、他者とのコミュニケーションにおいて運用できる能力

(石原(編) 2015: 1)



3

1. 研究の背景 – 習得に関わる要因 –

- 習得の対象となる語用論的特徴：受容・産出
- 学習環境：外国語環境・第二言語環境
- 文法能力
- 指導の効果
- ...

- インプットの量*種類*頻度
- 滞在期間 ・ 文法能力
- 動機付け
- 意思決定過程
- ...

個人差

Taguchi (2019)

4

1. 研究の背景 – 日本語学習者の語用論的能力 –

- 発話行為の**産出**における語用論的特徴の記述が中心
 - 使用されるストラテジーの使用頻度や談話構成
 - 緩和表現 **受容** (理解や適切さの評価) 能力は???
- 日本語母語話者との**差異**が生じる原因：
 - 語用論的転移 **習得と学習環境**との関連は???
 - 意思決定過程

5

2. 先行研究 – 日本語学習者の語用論的受容能力 –

- 間接発話行為の理解能力

	Taguchi (2009)	張 (2017)
学習者L1	アメリカ英語	中国語
L2レベル	中上級	上級
データ	断り・不同意	不同意
主な結果	慣習的間接発話の理解： 正確さ：低、反応時間：短	慣習的間接発話の理解： 正確さ：高、反応時間：短

付加されるヘッジの形式（「ちょっと」「かもしれない」など）によって、理解度が異なるのでは？

6

2. 先行研究 – 語用論的受容能力と学習環境 –

- 学習環境（滞在期間と目標言語に対する接触密度）

	Bardovi-Harlig & Bass (2011)	Taguchi (2012)
L1-L2	混合-アメリカ英語	日本語-アメリカ英語
L2レベル	初中級-初級後半	中級
対象	慣用表現の認識	間接発話行為の理解 慣用表現の認識
主な結果	目標言語への接触密度の影響 > 滞在期間 (1-18ヶ月)	接触密度の影響⇒個人差

- ヘッジを伴う日本語の間接発話行為の理解は？
- インタラクションの密度やインプットの量・質も影響？

7

3. 研究目的

- ヘッジ表現を伴う間接発話行為に対する中級日本語学習者の理解能力は…
1. 言語形式の違いによって、理解度は異なるか
 2. 学習環境（語用インプットの量やインタラクションの密度）の違いにより、理解度は異なるか

8

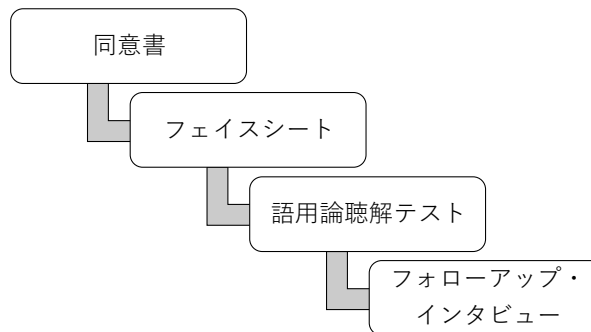
4. 研究方法 – 調査協力者 –

➤ 国内在住の大学生・大学院生

- 日本語母語話者 (NS) 23名
 - ・ 年齢：18 歳から26歳 (平均20.8歳、SD=2.6)
- 日本語学習者 (NNS) 22名:
 - ・ 年齢：18歳から30歳 (平均24.6歳、SD=3.0)
 - ・ 日本での滞在期間：2か月~5年 (平均19.3か月、SD=18.4)
 - ・ 母語：混合 (中国語11名, インドネシア語3名, 伊語3名, 越語2名, 西語・独語・アラビア語各1名)
 - ・ 習熟度：中級 (SPOT90 の56~79点、平均69.5点、SD=6.6)

9

4. 研究方法 – 調査方法 –



4. 研究方法 – 語用論聴解テスト –

【材料の選定】

↓

【テスト問題の作成】

- ・ 心理実験ソフトE-prime 3.0の使用
- ・ 練習問題：2問
- ・ フィラー問題：25問 (同意, ヘッジ無し不同意, 誘い, 断り)
- ・ ヘッジを伴う間接不同意：15問
 - ① 疑念の「かな」：5問
 - ② 判断不明の「かな」：5問
 - ③ 否定疑問「～ないか」：5問

ランダムに提示

11

4. 研究方法 – 学習環境調査 –

➤ フェイスシート 参考：Bardovi-Harlig & Bass (2011), Taguchi (2012)

- ・ 日本語の動画視聴時間/1週間
- ・ SNS等でのやりとりの時間/1週間
- ・ 教職員とのやりとりの時間/1週間
- ・ 友人や知人とのやりとりの時間/1週間
- ・ サービス従事者とのやりとりの時間/1週間
- ・ 母語以外に日常的に使う言語
- ・ 日本人の親しい友だちの有無
- ・ 住環境 (一人暮らし・寮で個室・寮で日本人と・他)

➤ 半構造化インタビュー 参考：Taguchi (2012)

- ・ 上記内容について補足

12

4. 研究方法 – 語用論聴解テストの分析 –

- ▶ 正確さ
 - 話者の意図が正しく判断:1点, 判断できなかった場合:0点
 - ① 疑念の「かな」:5問
 - ② 判断不明の「かな」:5問
 - ③ 否定疑問「～ないか」:5問

合計15点

- ▶ 反応速度
 - 正答のみを対象
 - 100ms以下および平均±2*標準偏差を外れ値として除外し、平均時間を算出

ヘッジの形式別に得点と反応速度を算出

13

4. 研究方法 – 学習環境調査の分析 –

- ▶ フェイスシート
 - 動画視聴
 - SNS等
 - 職員と
 - 友人や知人と
 - 教員と
 - サービス従事者と
 - 母語以外に日常的に使う言語
 - 日本人の親しい友だちの有無
 - 住環境
- ▶ 半構造化インタビュー
 - 上記内容について

- なし
- 1時間以内
- 1-3時間
- 3-7時間
- 7時間以上

記述

日本での滞在期間+SPOTも参考 ▶ 語用論聴解テストの結果と比較検討

14

5. 結果 – 理解の正確さ① –

言語形式	項目	平均点	SD	最高点	最低点
NNS (n = 22)					
合計	15	12.09	2.35	8	15
疑念「かな」	5	2.86	1.91	0	5
判断不明「かな」	5	4.32	0.72	3	5
否定疑問	5	4.91	0.29	4	5
NS (n = 23)					
合計	15	14.70	0.56	15	14
疑念「かな」	5	4.96	0.21	5	4
判断不明「かな」	5	4.78	0.52	5	4
否定疑問	5	4.96	0.21	5	4

NNS: 疑念「かな」 < 判断不明「かな」 < 否定疑問
 疑念「かな」は、他2種に比べSDが大きい。

15

5. 結果 – 理解の正確さ② –

〈終助詞「かな」(思考過程用法)の間接不同意の例〉

【場面説明】	会議室で、男の人と女の人が勉強会の方法について話しています。
【質問】	男の人は、グループワークをすることに賛成していますか。
【会話】	女性: 勉強会は、どうやって進めましょうか。
	男性: あ、初めて参加する人も多いですね。
	女性: じゃ、グループワークがいいと思います。
	男性: 話すのが苦手な人もいるかなー。



声の感じ!



.....

16

5. 結果 – 理解の正確さ③ –

〈終助詞「かな」（疑念用法）の間接不同意の例〉

【場面説明】	会議室で、男の人と女の人がパーティーの料理について話しています。
【質問】	女の方は、寿司を注文することに賛成していますか。
【会話】	男性：パーティーの料理、何にしましょうか。
	女性：あ、留学生がたくさん来るんですね。
	男性：そうですね、寿司はどうですか？
	女性：魚が苦手な人がいないかなー。



声の感じ！



.....

否定的

17

5. 結果 – 理解度と学習環境① –

- インタラクション密度がより高い場面での言語使用
- 語用インプットの多さ

➤ NNS 重一さん（仮名）

- 正確さ：**15点/15点**・反応時間：**249.3 sec**

母語	中国語	滞日期間	12ヶ月	親しい日本人	○
母語以外	日・英	SPOT (JLPT)	67 (N2)	住環境	寮で日本人と

インプットの量



18

5. 結果 – 理解度と学習環境② –

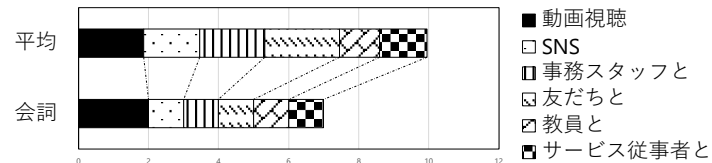
- インタラクション密度がやや低い場面での言語使用
- 語用インプットの少なさ

➤ NNS 会詞さん（仮名）

- 正確さ：**8点/15点**・反応時間：**942.2 sec**

母語	中国語	滞日期間	18ヶ月	親しい日本人	×
母語以外	英語	SPOT (JLPT)	61 (N2)	住環境	寮で留学生と

インプットの量



19

5. 結果 – 理解度と学習環境③ –

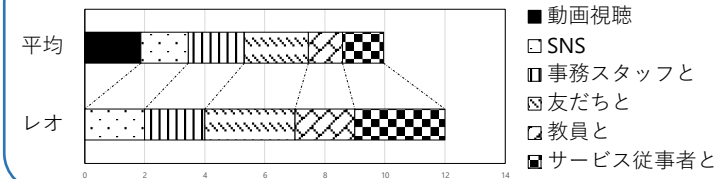
- インタラクション密度が高い場面での言語使用
- 熟達度⇒語用インプット？

➤ NNS レオさん（仮名）

- 正確さ：**9点/15点**・反応時間：**4359.3 sec**

母語	イタリア語	滞日期間	2ヶ月	親しい日本人	○
母語以外	英語	SPOT (JLPT)	56 (-)	住環境	寮で個室

インプットの量



20

6. おわりに - 結論 -

➤ ヘッジ表現を伴う間接発話行為に対する中級日本語学習者の理解能力は…

1. 言語形式の違いによって、理解度が異なるか

Yes ! 正確さ：多機能な「かな」は難易度が高い
反応速度：個人差が大きい

2. 日本語との接触量の密度の違いにより、理解度が異なるか

Yes / No インタラクションの密度 * インプット量 * 熟達度
* 滞在期間？

21

6. おわりに - 今後の課題 -

➤ 縦断的調査

習得過程の解明



➤ 不同意発話の調査

産出能力との関連



参考文献

- 石原紀子 (編) (2015) 『多文化理解の語学教育 語用論的指導への招待』 研究社
- 張麗 (2017). 「慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響：JFL中国人上級日本語学習者を対象として」 『日本語教育』 167: 31-45.
- Bachman, L. F., & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Bardovi-Harlig, M & Bastos (2011) Proficiency, length of stay, and intensity of interaction and the acquisition of conventional expressions in L2 pragmatics
- Taguchi, N. (2009). Comprehension of Indirect Opinions and Refusals in L2 Japanese. In Taguchi, N. (Ed.) *Pragmatic competence*. (pp. 249-273). Berlin/New York: Mouton de Gruyter
- Taguchi, N. (2012). *Context, Individual Differences and Pragmatic Competence (Second Language Acquisition)*, Multilingual Matters Ltd
- Taguchi, N. (2019). *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Pragmatics (The Routledge Handbooks in Second Language Acquisition)*, Routledge

23

謝辞

• 本研究は、

科学研究費助成事業 若手研究 18K12418
「日本語学習者のヘッジ表現の習得過程
-中間言語語用論の観点からの考察-」

による助成を受けて行ったものです。

24